

町内にはさまざまなコミュニティがあり、独自の活動をしています。そんな皆さんの活動やイベントをご紹介しますコーナーがステイ・スマイル(笑顔のまま)です。

Stay Smile 確固とした農業経営を構築

町新規就農支援事業

立沢にて2012年に輪菊にて独立営農を開始し早4年目に入りました。研修期間を含めると5年近くになります。1年目はまずまずのできてました。2年目3年目と面積を2反に増やしましたが昨年の雪害や様々なできごとが降りかかる中、苦戦し、思うような菊ができずに足踏みしている感があります。

しかしながら様々な失敗や経験を検証し、対策を打ったことで向上した面も感じています。これからもその姿勢は変えることなく失敗や災害等にひるむことなく生産者としてどこまでも向上していく覚悟でいます。

今は、本郷小学校上の圃場で2反(ハウス6棟・露地)にて耕作しています。今後は借入地を増やし栽培面積を増やすことも考えています。やはり所得を増やしていくことが目的ですが、市場から期待されている夏秋期の輪菊を少しでも増産につなげ、市場およびその先の実需者の期待に応えるべく励みます。いい菊ができる高冷地という地の利がこの地域にはあるので、今まで生産者の方々が築いた伝統を継承し発展させることが僕らの役割だと思っていますし、確固とした農業経営を構築していくことが必要と考えています。

具体的には規模拡大と雇用の活用なのですが、「生産技術は今後も大きく変わることはないのでは」と感じています。経営に視点をあて、雇用を活用できるようになることで、むしろ「生産現場にも革新の可能性が広がるはず」とも考えています。そのためには、今後も地域の皆様からお知恵とお力をお借りすることになると思います。

現在借入地を増やしているのですが、年毎に生産を増やし、それに応じて空き時間を活用しながら作業を手伝っていただけの方を増やしていく考えています。今後もよろしくお願ひします。



▲関 晃さん

Stay Smile 子育てはたくさんの笑顔とたくさんの手で ~子どもの場所から~

NPO法人ふじみ子育てネットワーク ☎62-5505

「時計時間」と「心時間」

放課後のあそびばに来ている小学生の男の子がお母さんに「お母さん！あそびばには、どうして時計がないか知ってる？」と聞き「それはね、時間を気にしなくていいからなんだよ」とうれしそうに教えてあげたそうです。お母さんは、毎日時間に追われている我が子の生活を振り返り、胸が痛んだそうです。

放課後のあそびばを始めた頃、数分おきに「今何時？」と聞きに来る子がたくさんいました。自分で決めて自由にあそんで良い場所になのに、時間ばかりが気になって、あそびに集中できない子どもたちが多くことに驚きました。「何時から何時まではこれをする時間」と決められた“時計時間”中心の生活になってきていることで、いつも時間が気になり、その時その時を楽しめない体になってしまったのかもしれない。子どもたちが自分のペースで使える“心時間”の大切さを私たち大人も知らないで過ぎていきます。

時間で動くことが大切とばかり、あえて幼児期から時計時間で生活している家庭もあります。でも、そうではなくて、幼児期はなるべく子どもが体や心で感じる“心時間”を大切にしましょう。小学生も意識して心時間を作ってあげましょう。時計が12時になったから昼ごはんを食べるのではなく、たくさんあそんで気がついたら、うんとお腹がすいている、だからお母さん早くご飯にして、というような時間の流れは、子どもの体の感覚や集中力、想像力、創造力を育みます。また、ひとりひとりの個性も育ちます。心時間をたくさん過ごした子どもは、時計時間で過ごすときにもきっと、楽しむ力、集中する力を発揮するでしょう。



富士見町子ども読書活動推進計画（第2次）

富士見町読書活動推進委員会では平成22年3月から、「富士見町子ども読書活動推進計画」5カ年計画を策定し実施してきました。平成27年度から第2次計画がスタートします。

今回から計画にかかわる年代ごとの活動のご紹介をさせていただきます。「読書を通じて家庭での触れ合いが広がるような活動となりますように」と計画しました。

【基本目標】 「本と遊び、本に学ぶ」子どもを育てる

- 【基本方針】
- ①読書活動への子どもの意欲的態度「本と遊び、本に学ぶ」子どもの育成
 - ②家庭・保育園・学校・地域による子ども読書活動の推進
 - ③子ども読書活動への啓発

以上を方針として、家庭から地域まで様々な環境で本と触れ合うおもしろさを紹介していきます。本と遊べるような関係に、そこから学びを得ることができるような富士見町となりますよう運営していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひします。



Stay Smile ふじみ発掘ものがたり

富士見町には国史跡の井戸尻遺跡をはじめ、全国に名を知られた遺跡がたくさんあります。富士見の発掘や研究にかかわった人々を振り返りながら、町内の遺跡を紹介します。

おらあとうの村の歴史は おらあとうの手で明らかに 井戸尻遺跡（昭和33年）

「そらそこの、公民館の下の丘の地下にも君達の祖先の縄文時代人が掘り起こしてくれるのを待っているんだ！」考古学者、藤森栄一さんの講演に、会場は沸きました。昭和31年に発足した境史学会の、境地区公民館での発会式のことです。「ようし、そんなら掘ってみよう！」と、選ばれた場所が池袋の井戸尻でした。境史学会と境地区公民館のメンバーに諏訪清陵高校の学生が加わって最初の発掘が始まったのは、昭和33年3月15日のこと。その中心的存在だったのは境農協職員だった武藤雄六さんでした。焚き付けた張本人の藤森さんが病に倒れたため、武藤さんは一升瓶を2本ぶら下げて、尖石遺跡を発掘した宮坂英弐さんに指導のお願ひに行きます。

最初に掘りあげた第1号住居址は空っぽ。しかし2号・3号には縄文時代中期の豪華な土器が多量に遺されていました。これで発掘調査は終了、のはずだったのですが、これに勢いづいた高校生が宮坂さんの許可なく、もう一軒住居址を掘ってしまい、そこからはまた見事な土器がガラガラと。というわけで4号まで発掘する結果となりました。武藤さんは宮坂さんにこっぴどく叱られたようですが・・・。

出土した土器は、そのころでは類をみない見事なものばかりでした。発掘は驚異的な成果をおさめ、4月25日には井戸尻遺跡保存会が発足。これ以後、地域での発掘や研究が進められ、のちの井戸尻考古館の礎となっていくのです。

その活動は精力的かつ先進的で、その後、日本の縄文研究をリードしていきます。井戸尻の発掘は“おらあとうの村”どころか、日本列島の歴史をひもとく重要な発掘となりました。

人びとの熱意がすべての出発点だったのです。



▲村の歴史を掘る



▲慎重に、慎重に



▲土器が出た!

撮影:武藤 盈